仙台市災害ボランティア応援紙＜　第４号 4/14　＞

復興ニッポン cha･cha･cha！

被災地の復興のために汗を流し、知恵を出している災害ボランティアの頑張りをお伝えする＜支え合い、助け合い、協働＞のための情報紙です。「みんなは、どんな活動しているの？」今すぐ知りたい、アイデアや取り組み。災害ボランティア最前線からお届けします。（※cha は「care」「help」「act」の頭文字）

発行：仙台市災害ボランティアセンター

◆災害ボランティア･スナップ◆

被災者の方を応援するため、1日でも早く普段通りの生活を取り戻していただくため、活動する災害ボランティア。活動の様子を、写真でお伝えします。

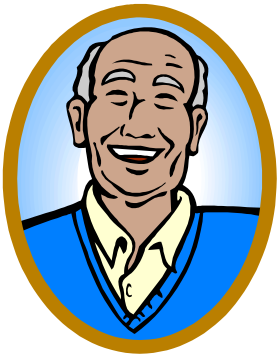
◎復興への祈りこめて鶴を折っています。災害ボランティアの思いよ届け！（左）
◎被災者へ災害ボランティアが向った件数が表現されています。（中）
◎津波被害にあわれた被災者宅の泥かきボランティアチーム、おつかれさまでした！（右）

◆現場で活動する災害ボランティアの声をお届けします◆

自分が震災を体験したことで、また、テレビや新聞などで震災の映像を見て、「助けたい」「役に立ちたい」そんな一心で駆けつけてくれた災害ボランティアがいます。今回は、被災者支援の現場で直接聞いた彼らの思いや感じたことをお伝えしていきます♪

【ボランティアの声・こえ】
帰りの時間も行きたい所も選べて活動しやすいんです。

学校の掲示板でボランティアセンターのことを知り、電話して来ました。85 歳の一人暮らしのおじいちゃんの家の外の片づけに行ったときは「会えてよかった」と思えるくらい笑顔が最高。ジュニアリーダーとして子どもたちと遊ぶ活動もしているので、ここでも生かせればと思っています。
（女子　高校2年　若林区蒲町在住）



地震のとき夢メッセにいて、車が津波で流されました。家は無事でしたが、職場が津波を受けて失業中です。ボランティアセンターのことは、河北新報で知りました。今できることをやろうと、3月 21 日からボランティアセンターに来ています。飯田や沖野地区のガレキを撤去するボランティアさんを車で送迎したり、一人暮らしのおばあさん宅では、壊れたタンスやガラスだらけの家の中を片づけたり。おばあさんには、泣いて喜ばれました。4月上旬までボランティア活動をして、その後は就活をする予定です。

【ボランティアの声・こえ】
津波で失業しましたが
今の自分にできることを。

（男性　20 代　若林区今泉在住）

【ボランティアの声・こえ】
寄せ書きや千羽鶴プロジェクト
地図班から発信しています。

市役所で電話番号を聞き、ボランティアセンターが立ち上がった2日目から手伝いに来ています。「事務やる人いませんか？」と言われて「ハーイ！」と受けてから、ずっと地図班です。ボランティア要請があると、その場所を調べて地図を添付するのが役目。現場に行かないので、状況がわからないもどかしさはありますが、私たちが用意した地図を持って、ボランティアのみなさんが行って活動して戻ってきてくれるので、役立っているのかなと思います。地図班のメンバーは長期の人ばかり。「ありがとうメッセージ」や「ボランティア参加者リレーメッセージ」、「千羽鶴プロジェクト」などの発信役にもなっています。（女性　30 代　塾講師　太白区在住）

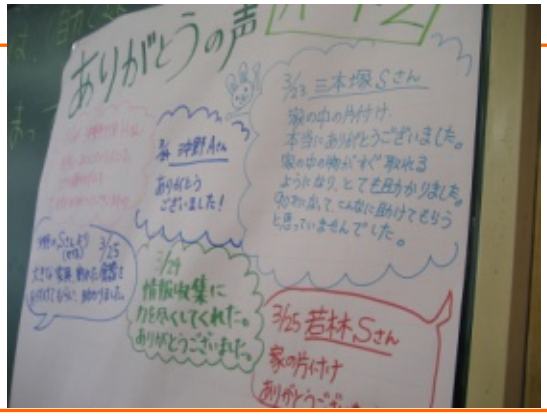
【ボランティアの声・こえ】
青年海外協力協会の建築士も
自炊しながら活動しています。

青年海外協力隊の OB や OG を中心とする青年海外協力協会（JOCA）からも、7名が活動しています。被災建築物の判定士として、ボランティア要請を受けた建物が、ボランティアが安全に活動できるかどうかを判定するのが役目です。活動できないと判断した場合は、区に相談するようにアドバイスしています。3月 22 日からボランティア活動に来て、4月まで手伝う予定です。9時から 15 時まで活動して、これからウィークリーマンションに帰って自炊ですよ。（男性　60 代　建築士）

Check Point!1

★ありがとうメッセージ★

ボランティア待機所に張られた、ありがとうメッセージ。「ボランティアが活動した後、ありがとうって電話がくるんだよね」という電話担当のひと言がきっかけで作ることに。どんどん書き込まれていく「ありがとう」が、ボランティアの励みになっています。（若林区）

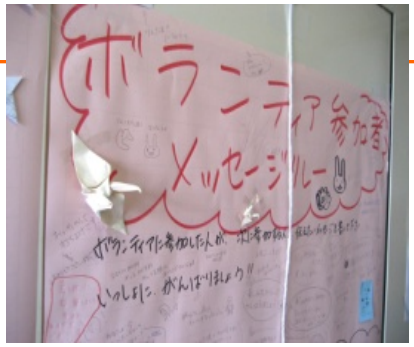


【災害ボランティアコーディネーターの声・こえ】
訓練してきた年５回の研修が
生かせています。

災害ボランティアコーディネーターに登録して4年目です。年5回の研修で訓練してきたので、ボランティアのみなさんがスムーズに活動するために、生かせることがいっぱいあります。東北のお年寄りは控えめで、依頼する人数も少なめに言う方が多いんです。「2人でいい」という方には、「4人行ってもいいですか」と問うと喜ばれるんですよ。被災された方の中には、ボランティアとの年代のギャップや言葉づかいからカチンとくる方もいます。派遣する際も、年配の人と若い人が組むようにと考えています。ボランティアの中には、中山から自転車で若林区まで来ている人もいます。外国の方も、カタコトでもわかるんだっけね。「外国人の方に来てもらって助かった」という声が届いて、本人に伝えたら笑っていましたよ。（男性　60 代　福祉施設職員　若林区大和町在住）

Check Point!2

★ボランティア参加者メッセージリレー★
ボランティアに参加した人から、次に参加する人へ、伝えたいことを書き込むメッセージリレー。「がんばろう」という内容はもちろん、「今食べたいモノ投票開始！」も。ちなみにただいまのトップ３は、焼肉、ラーメン、チャーハンです。（若林区）



【災害ボランティアセンター運営職員の声・こえ】
派遣したいけどできない
その心苦しさは若林区特有です。

ボランティア要請の電話を受けるのが、「依頼受付班」です。当初2台しかなかった電話は今8台に増え、折り返しの電話もかけやすくなりました。個人宅の片づけも「屋根が落ちている」とか「壁が崩れている」とか、要請の内容によっては事前に建築士のボランティアが伺って、活動できる状況か建物の危険度の判定も行っています。被害が大きかった若林区特有の悩みなのかもしれませんが、要請のご連絡をいただいても、まだボランティアを派遣できない地区があります。同じ町内会であっても、行けるところ、行けないところがあるのは、本当に心苦しいかぎりです。（女性　依頼受付班　長嶋副班長）

Check Point!3

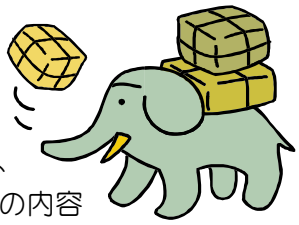
★千羽鶴プロジェクト★
（左上）「ボランティア参加者リレーメッセージ」の片隅に、誰かが張りつけた折り鶴を見つけた地図班。ボランティアに来た人が、待ち時間にも何かしら活動できるようにと、千羽鶴を折って避難所に贈ることを考えました。高校生４人によるポスターも完成！（若林区）

（右上・下）メキシコと日本を結ぶ“千羽鶴”。日本語を学びに、メキシコから仙台に来て１年半のヴィクトルさん。ボランティア初日、待ち時間の合間に千羽鶴を折っていました。まだカタコトだけれど、折り鶴の翼には、「メキシコ」と「日本」の文字が。（若林区）

◆ ゾウの聞き耳　　宮城野区災害ボランティアセンター　◆

各地の災害ボランティアセンターの状況を、ゾウのように大きな耳で聞いて、近況をお知らせします。

「はい！こちら要請班です。」



宮城野区のボランティア要請受付班には、電話が2台。被災された方からのご依頼を受け付けています。ご家族を無くされた方、ご親戚が見つからない方、家を流された方、茫然自失として頼みたいけれど、なにをどうやって頼んだらいいのか……、という状況の方も多くおられます。そんな中で、短時間でお話をうかがい、ご依頼の内容を整理することが必要になります。相談対応能力を発揮しながらも、毎日、数十件の対応をしていると、ちょっと疲れが出ることも。ボランティア同士の支えあいも、求められるところかもしれません。

★コラム　鳥の目･虫の目　　再利用？廃棄物？どうしたらいい？

今、災害ボランティアの現場では、津波で流された様々なモノの片付けなどが進んでいます。ていねいに洗って再利用するもの、リユースに回すもの、廃棄処分になるものなどが混ざり合っています。ボランティア活動ではまず、全てを大切に扱う心構えが大切ですね。持ち主の方が考え廃棄を判断した際に参考になる資料があります。廃棄物資源循環学会が、廃棄物分別･処理戦略マニュアル Ver.1(処理:「リユース･リサイクルを見据えた分別戦略中心)を出しています。分かりやすいポスターや資料もありますので参考に！
(2011年４月４日　Ver.1 Re.1 公開 http://eprc.kyoto-u.ac.jp/saigai/)
災害ボランティア活動や自宅･知人宅での片付けや処理にご一読ください。

編集後記

天災は忘れた頃にやってくる・・・、震災から１ヶ月を目前にして最大余震がありました。私の周りではライフラインが復旧し、片付けも一段落し、「さぁ！これから！！」と次の一歩を踏み出した人たちが多くおりました。そんな中での余震・・・正直なところ、私も心が折れかけました。しかしながら、揺れが落ち着いてすぐお風呂に水を溜め、空きペットボトルに飲み水を確保し、いつでも逃げられるように荷物を準備しました。経験って凄いです！！今まで何度も大きな地震を経験した割には、本当に不自由な生活を強いられることが無かったので、防災グッズや災害時の心構えなど無頓着すぎたように思います。“備えあれば憂いなし”とは言いますが、それでも限界がありますよね。まずは、最低限の知識と防災グッズを準備しておきましょう！辛く悲しいだけの経験にしないよう、この状況から多くを学んで生きていきましょう！（山田裕美）

発行：仙台市災害ボランティアセンター　広報班　黒田
TEL022－262－7294　http://www.ssvc.ne.jp/　当紙が WEB で読めます！
編集：広報ボランティアチーム　遠藤、大谷、木村、佐藤、茂木、山田
連絡先：仙台市災害ボランティアセンター　E メール sendai - vc@poppy.ocn.ne.jp

●夜間に自転車に乗る際は、必ずライトを点灯しましょう！周りの人への思いやりを！